

微
すめるき
明

100

漏斗のぎざぎざに結着した一
 点から、僕が生れてくる。夜
 深く路を歩む。誰も居ない。
 起きてもいるのは一人だけな
 だ。石垣から「夜」が湧いて
 くる。風が僕を心押にきりき
 り轉がって、つとと睡れてし
 まふ。家々がおおおづのしか
 た底を底えと引ききつり込ま
 れるような気がする。圓を畫
 いて幾重にもかさんつたマン
 ホールの蓋がか蓋とつたま
 ゐる。みるみるからだが溶け
 いて小さなからでるだけ
 づ。それが僕だ。そして狐獨
 惑えんだ!!。其處に僕は根を
 握る。僕は行爲も信もない
 んだ。僕は誰も信じないよ。

なつちまつた。
 「信じる」といふ言葉すら生
 づいてゐた。

此の路には先刻の雨が止んだ
 からこゝに靴跡が残つてゐる。
 二人で歩いた人もあつたやう。
 一人だけのものもあるだらう。
 けれど、凡て無數の「僕」の
 連續なんだ。そしてこの僕も
 以前の足跡をたどる。わかつ
 たつてもないんだ。それで、
 ところが此の足跡にはすばら
 しい重量が懸つてゐる。今の
 僕には、押だしてしかわから
 ない。僕は遙かこうして生
 きてゐるんだ。此頃僕には宇
 宙がひひしと應えらんだ。

×
 乾いたむちらは
 そごそめく足どりだ
 いりみだれた水珠の群れ

孤獨が
 偏圓のくぼみながるゝ雪の
 片
 すめろき
 己が黒髪を越こて
 うつろな赤上に
 ひらんどうのステーヂ気分
 が日
 ひとりさすらいのこだまして
 とうろかにむちは鳴るなる
 細め氷りにむちはなる
 はしれ とうろか
 身の果つるまで
 (註)「とうろか」とはロシヤ地
 方、三項立穩
 (註)「めろき」はギリオータウ
 古語「敬明」の意
 (一九二一年文學部作品抄)

老婆

河村 泰司

[illegible]

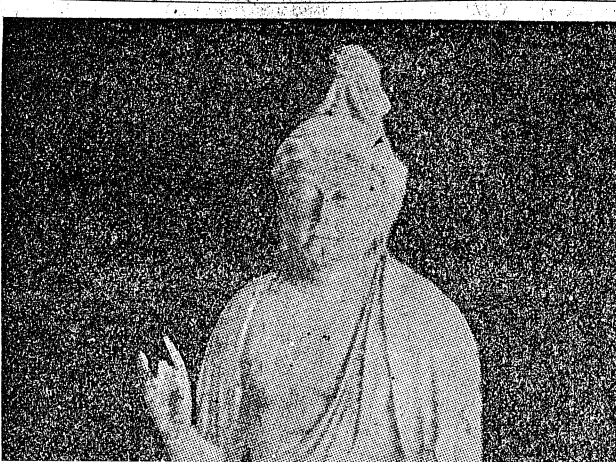
機

植田馨

[illegible]

技藝天

眞寫
部で頭部は全然異り、天平の様式
顔は豊満であるが、たるみはなく、



涙を拭いてもあへず、
も後をつづけた。
な風に息子が丁度おめ
になつた年の秋にそれ
無理な勉強がたゝつて
頭眼を悪うしてしま
めは普通の近目とか云
養生したのが間違ひで
の暮にはそれまで十日
つていたお醫様ももう
云わはつて、わしらは
も泣はんじやつた。息
の翌年の春には東京に
等學校えとやらへ行く
とつたが、そんな譯で
きどこか今迄の學校さ
らめにやならん様にな
うし、わし二人は、ん
んやりとしてもうた

息子はこれが因で年明
かりやするて夏之初め
で死んで死んで死んで
んでも死に切れんのが
や。ちやうて死んでもう
た。つた一人の力を
息子に死なれたんで、
息子は氣は氣支やうと
なり落着いて、それが

私は戦後こち
を見聞して來
は大なり小な
によるものであ
に關せる事ら
害を受けた
の荒波と
の老姥

前
の世に何の因果があつたの
か知らんけど、わしは何時ま
でたつてもこんなやりをして
そこの野良犬めたいにち
こ。這い廻つて。そんでも生
きならんとは神様もあんな
り無慈悲じや」

私は茫然として老姥のこの言



しやぼんだま



うした幾多の悲劇
 来た。それゆゑの事
 なり戦争の被害に
 あつた。この老婆
 も結局は戦争の被
 めものであらう。世
 とは實に烈しい。
 せさへ關死の憂き
 けない様に生きなさい。―陳
 腐な言い草であつたかも知れ
 ないが、私は他に適當な言葉
 が無かつたのでそのまゝ乗車
 の準備をした。
 やがて轟と突き破る様にして
 汽車がついた。私は改札を出
 て、汽車の乗車口へ近づきつゝ
 もつと悲惨なのが、それにそ
 んな話だけで物を呉れてや
 ろうとしたり鼻奮したり、神
 妙な言葉をかけたりして
 近頃限りがない。それは安
 價なセンチメンタリズムでは
 ないか。お前は未だ／＼子供
 心で可なり羨ましく前より

[illegible]

却つて不思議なではありませんか？　と、また角この時の私の云持では自動車も動かしたと云ふことが、何か非常に大きな価値のある事に思ひました。二十米も進んだ思ふ、隣席の教官に注意されて思ふす我に返り、もう一度クラッチペダルを踏んで、スピードを第二速度に切り換へるうちに、その操作の方は全くお留守になり、幾度か周囲の土塊に突き當りさうになりました。

此のように自分に車を運転しているのか、車に運転されているのか分らない一週間を重ねて行くにつれ、練習と熱心の恐ろしきは偉大な力を發揮し、遂に或る日、その頃

屋根と壁根の間から見える妙に四角い室にも登めた霞がぼんちとくつついてる様だ、子供等の遊び聲に我に歸るとまぶたの裏をしやばんだまの様な赤や青や金の玉ががすめて通つた。

「動きたしたのです!!」と二時間の後、私は竊盗犯としてこの場で捕えられた。そして今は、つめたい留置場の片隅で、あのキラ／＼輝く星を眺めてゐるのです。

星——そうです。あの星が幼い私に與えて呉れた感覚、その感覚が成長して今このような姿を見せてゐるのです。星よ、嘲つて呉れ、光つて呉れ、そうして世界中の人間にこんな馬鹿な奴が居るつてことを知らせて呉れ——。

× × ×

皆さん、くだらない話に耳を貸したとお思ひなさい事でしょう。まあ、もう夜も更けたいところです。どうかお寝みなさい、さようなら。

お断り　　今回の文藝欄には一般読者による作品が非常に少く、宿題として得ず高次の作文の域に入り、和倉先生にお断りして選定で戴いた事をお断りししておく。

